

# ○自由報告I

## 島嶼村落の変貌分析

—瀬戸内海の一島嶼について—

林 雅孝（山口県立女子短大）

### 目次

1. 序
2. 歴史的変貌
3. 村落構造の変貌
4. 生活構造の変貌
5. 都市化との対決

現在の農山漁村その中でとりわけ、へき地離島と呼ばれている様な土地に、日本の古い社会構造が残っている。一ということができる。しかし、また、現在のへき地離島が、かつては、文化の中心の通路であった。一ということもできる。交通手段や社会関係の変化、あるいは体制とのかかわりあい方の変化で、現在と昔がまるで逆になっている、というところは多いからである。たとえば、奈良、大、京都と東京との関係、あるいは一般に山地と平野の関係などである。このような訳で、島嶼村落には、いろいろと興味のあるところが存在する。もちろん、現在の最大の課題は、現代における社会の変貌が、へき地、離島といわれる島嶼村落にまで、波及効果を持つている、ということにあることは論を待たないが。

最後の意味では、事例にとつた島嶼におけるばあ、近々の中に完成する本土との架橋が、経済圏、社会圏、観光圏、文化圏に変化を及ぼす、その態様がもっとも問題であろう。妥当な量と質におけ

る急速な近代化、都市化を、しかし、古い文化——地域の心——を統一的に保存しよう、などという動きで表現されるといえようか。小論は、かかる問題に対応するものである。

### 1. 歴史的変貌

小論で事例にとつた周防国（山口県）大島郡沖家室村は、藩政期の一村落である。一島一村落をなすが、母島の大島の附属島をなすため、島岐の性格は、いやます、ともいえよう。民話によれば、遣唐使の風待港であったとか、安芸の宮島様はこちらに來るはずであったとか、源義経が壇の浦攻めのさい立ち寄ったとか、足利尊氏追討のさい家屋合戦の地であったとか、いろいろな歴史的逸話に満ちている。居住の歴史は相当古いのではないかと推測はされるが、しかし、いまのところ明白な資料はないようである。たゞ、日本の中心文化と接触の機会があった島のようにある。瀬戸内海の島嶼一般に言えることと思われるが、平家の落人の隠れ家の地、あるいは河野水軍の落人の隠れ家の地、という話も非常に多い。そして、この辺りからは史実が残っていることも多い様である。慶長以後、領土の再編成にともなう村落の形成がすむが、江戸時代の前半期は、毛利公江戸参勤交代のさいの領内最後の宿泊地として、対岸の地家室と共に繁栄する。西国の大名（島津氏、宗氏、長崎奉行ほか）の宿泊の史実もあり、領主の庇護の下、この頃かなりの繁栄を示した、と推測される。

江戸後期、航路の変更（陸路）にともない繁栄は、下火になつたものと推測されるが、通商航海、沿岸、遠洋漁業の村としてかなりの経済力は持っていたと思われる。

さらに、明治初期より明治年間に、日本の資本主義興隆の波に乗って、沿岸、遠洋（比島、台湾、朝鮮、四国、九州）での活動を中心に第三の繁栄期を示したらしく「家室千軒」なる言葉を残している。この間、極めて積極的な移民もなされた。この移民の効力は、昭和二〇年の敗戦後まで及び、戦後の危機を移民の現地からの移送物質で突破したという家が多い。戦後間もなく螢光灯その他電気器具が、社会一般に先がけて普及し、調査団を驚かせたこともあるという。移民の盛んなこと、愛郷心、敬神崇祖の念、一致協力（島内結婚で出て行く人が多い）の強いこと抜群であった、と島民は語る。話は飛ぶが、山口県北浦の捕鯨業に挑んだ最初の攻撃精神を落人武者の士魂だと説いた人（徳見光三）がいるが、この島の積極果敢な歴史もまたそのことを深く考えさせる。もし、村の精神というものが実在するならば――。

ともあれ、戦後の雇用政策による「人抜き」は、この島をも老人と子供の島とした。いま、過去の栄光の歴史に比すほどの思い切った猪展策は何も見当らない様である。残った人（世帯数は最盛時の三分の一、小学生生徒は昭和二三年の十分の一）の地道な離島振興方策の中にだけ、沖家室の将来がある。

このような現状もまた大きな歴史的過程の一断面にすぎないのかも知れないが、地域社会の変貌分析に関する理論構築完成を急ぐ必要を痛感する（以下本報告）。